

「行く河の…」と書いた鴨長明、「つれづれなるままに…」と話した吉田兼好、次々と命が生まれては消えていく「古事記」、翳りという負の要素からプラスへと昇華させる日本人の特長を説いた「陰影礼賛」。旅や流転が内容に含まれていながら、その他の古典や近代書物を読んでも、いまいち井然としなかったのには、無常観であるかどうかであった。無常感ではなく無常観であるということ、このことが重要であった。たかだか「感」と「観」という一文字の漢字の違いだけで、無常への態度が全く異なってくるのが、日本語の特徴である（もちろん先に出てきた「特長」も使い分けられるのも日本語の特徴である）。無常観に似た思想は他の国の思想や宗教、哲学、藝術など様々なジャンルにも出てくるし、日本の思想や特徴は、源流を遡れば大陸思想に結びついたり、戦後以降の変革からは欧米の思想が混ざり、日本独自の本流というのはいくらも言える。しかし、思想ジャンルと化した現代世界において「美しい」と感じるものを受け取ると、そこに「日本」を見出してしまっていた。そして、見出した日本の匂いへの内省を進めると、必ず「無常観」という壁が現れるのだった。

しかし、少し遠回りをして、「無常観」の話の前に、趣向（日本の匂い）の話を進めよう。日本の匂いというのは、なにも日本の古典や近代だけということではなく、茂木健一郎さん、養老猛司さん、原研哉さん、池田晶子さん、マルセル・デュシャンさん、パウル・クレーさん、村上春樹さん、千住博さん、いしいしんじさん、デヴィット・ボウイさんなど数え切れない程の人達が生み出してきた作品群と出会いながらも、同様の匂いを感じ取ってきたのだった。それは、間の取り方や日常からの作品化（仕事に結びつける姿勢）など多くの共通点があり、私が仕事をする上で大切にしていることでもある。何故、こういった国内外、時代問わず惹かれたものに日本の匂いへと繋がり、無常観へと広がりを見せていくのか。その理由の一つとして、自然を認めることが挙げられる。自然存在や自然現象を認め、自分という人間も自然の産物だと認めることが出来るかどうか。たとえば左右対称性。たしか「陰影礼賛」の中でも八重歯の話が登場すると思われるが、西洋的趣向の左右対称性への絶対的な美的性癖というのは、昭和的な日本の家庭に生まれ育った私にはないのだ。歯列も度が過ぎて悪ければ人体に悪影響が出てしまうが、西洋的な左右対称への美意識は当然、人間や生物にも当てはめられ、様々な外的要素を左右対称に修正していく。しかし、修正された顔や体型も微細に観察していくと、何一つとして左右対称のものではなく、生物である対象を作り込む程に不気味さが増していくのも頷ける。しかし、所謂「日本の美」と讃えられる枯山水などの庭園様式も刀も左右非対称であり、無常限度はあり、バランスがとて大切にされるが、どこかを崩して美に昇華させるという発想や趣向は、日本的と言えらるだろう。

日本の匂いから無常観の話に戻るが、無常といえは「平家物語」に出てくる諸行無常を思い出す人もいるかもしれない。私も中学生の頃だったと思うが、「祇園精舎の鐘の声…」で始まる冒頭部分を理解せずに、漢字の雰囲気から格好良い印象を抱き、蓮の花に座っている仏を思い浮かべていた（当たら

も遠からずといったところだろうか)。また、無常観と似たような印象を抱いていた語に諦観などの悟りの単語や、その反対の我執などの煩惱に関わる単語が挙げられる（これもまた当たらずも――）。

では、そもそも「無常観」とは無常に対するどんな姿勢なのか？ 手近にある『方丈記』内に収められているコラムを引用すると、『無常観』は仏教用語、『無常感』は文芸用語としてふつう使い分ける。同音だが『観』と『感』の意味の差は大きい。『観』は心眼をもつて対象に向かい合う態度を、『感』は対象に情緒的に感応する態度を表す。――『無常観』は非常な宇宙原理を容認するが、『無常感』はあきらめて涙する」と書いてある（※一）。最後の方はコラム作者の考えが混ざっていると見えなくもないが、「無常観」の方は無常に対して洞察していく姿勢だと言い換えることが出来るだろう。広辞苑から「無常」を引くと「一切の物は生滅・変化して常住でないこと」、「人生のはかないこと」、「人の死去」（※二全て広辞苑）とあり、つまり、全ての物事は留まらず、生まれては消えていくことだと言える。そして、ここに書かれていることは誰でも疑問に思うことではないだろうか。子どもが大人に「死んだらどうなるの？」と尋ねたり、思春期の子が抱く「どうして生きなきゃいけないの？」、「自分って何？」という疑問と類縁である。しかし、大抵の人が「死体」を「死」と勘違いしたり、抱いていた疑問から目を逸らして楽しさや忙しさにかまけるようになったり、世の中に溢れているそれらしい台詞に取合えず納得した振りをしたまま忘れてしまうのに対し、抱いた疑問に考えを巡らし、自分の言葉で作品化していったところが無常観という壁に出会った理由だろう。

では、肝腎の「四季無常図」の被写体になり、写っているものは何だろうか？ ここで被写体になっているのは、珈琲にミルクを垂らしたときに生じるミルクの動きだ。私は毎朝、珈琲を飲むのだが、昨年（二〇一〇年）に胃を壊してからブラックではなく、ミルクを混ぜて珈琲を飲むようになった。大学時代も始めの頃、インスタントコーヒーを愛用していたのだが、「珈琲を飲むのならレギュラー（コーヒー）にしなさい」と、先輩から半ば強引に渡された陶器のドリッパー。そのドリッパーに、コーヒーの粉を入れるのが、目覚めてからの初めての仕事だ。不均等に表面を作っている粉を軽く均した後、珈琲を美味しくする魔法の言葉「コピ・ルアック」を囁きながら中心に窪みを作る。その窪みに、そつとお湯を注ぎ始めると、珈琲の香りと共に、大学時代からの時間の流れが昇ってくるかのようだ。その香りの流れが、寝ぼけ眼の私を目覚めさせてくれる。そして、この香り（嗅覚）と時間の流れ（記憶）にミルク（視覚）の流れが昨年から加わり、形を留めないミルクの流れを美しいと思いつつも、崩さなければ美味しく飲めないジレンマと共に、結局はスプーンでかき混ぜること（触覚）を選ぶのだが、使用したスプーンを水溜めのグラスの中に放り込んだ時に生じる音（聴覚）で、美しい時間は終わりを迎える。この儚くも誕生と破壊が織り成す美しい衝動は、自ずと撮影という行為に私を突き動かしていた。

出会う無形の水流は毎回異なり、崩され、溶解して私の体内に入り（味覚）、私の血となり、魂となり、

私を動かしてくれている。それは珈琲を含む全ての食べ物だけでなく、不変とされる人工的な物質達も同様である。不変とされる人工的な物質達も、微細に見ていくと必ず変化が生じており、自然物も人工物も総じて万物において流れ（変化）は起き、流れの中でのそれらとの出会いが、私（あなた）を作り上げている。即ち、私（あなた）というのは一個の独立した完全無欠の個体ではなく、多くのもの（者・物）達の集積だと言える。そして、そんな私（あなた）も常に変化して（流れて）いる。その変化は儂さや抗い難い負の感傷を生むこともあるが、同時に一瞬一秒に彩りと感動を生み、四季という一年の流れの中に私達がいることを認識させてくれる。しかし、そんな四季という一年も、一度として同じものではなく、花の芽吹く時期、雪の降り方は毎年、その年にしか出会えないものであり、その一年は過去と現在と未来を含めた歴史の中にあることを再び認識するのだ。

つまり、珈琲に垂らしたミルクの流れ（被写体）を撮影していたはずが、一瞬一秒の生命の存在を写していたのだ。その一瞬一秒の生命の存在が紡ぐ四季、四季が織り成す一年、一年一年が積み重なる人の歴史、それらはマクロにもミクロにも動き、たとえ作品化し、筆を置いたとしても留まることはない。一瞬一秒の連鎖の歴史：その中には悲しみも、怒りも、憎しみも、喜びも、慈しみも同時に抱え、私（あなた）の中に寄り添っているものだ。それらを認め、共に生き、共に死ぬことが、今、私が無常観と言える姿勢である。

二〇二一年五月 エグチマサル

引用文献

- ※一 「ビギナーズ・クラシックス 方丈記（全）」、著・鴨長明 編・武田友宏、二〇〇七
- ※二 「広辞苑 第五版」、EX-word XD-S5000 収録、二〇〇一